支那古代哲學の一つの見方

飯島忠夫

支那古代哲學の一つの見方と云ふ題で、色々これまで考へてゐた事を諸君のお耳に入れて、御批評を願ひたいと思ひます。

支那哲學史には既に色々の學者の著述もあるのに、それらに對して別な見方もあると云ふ事は可笑しい事と思はれるであらうが、大體支那哲學史として普通に考へてゐる所は、儒教哲學史と云ふ傾向がありはしまいか、儒教哲學史のみが支那哲學史でないのは申すまでもないと思ひます、儒教が支那思想の本流であることは疑ないことでありますけれども、聊か儒教哲學史に偏り過ぎてはゐないかと考へます。

普通に支那哲學史を考へる場合には、先づ一番古く出來たとされて居る易及び書經洪範の哲學を說き、次に孔子の思想孟子荀子更に老子莊子乃至諸子を並べて來る。一通りは之で分つた樣であるが、この上に尙私は色々見て行く間にもう一つ突込んで考へるべき事があるではないかと注意した。其れは手取り早く申しますと、陰陽五行と云ふ事である。易の哲學は陰陽の哲學であり、洪範の哲學は五

行の哲學であると言つても宜しからうと思ふ。陰陽五行の思想が、儒教の哲學史の最初に說かるべき易と洪範とに出てゐるとすれば、第一に陰陽五行を調べる必要があると思ふ。易や洪範の出來る前に陰陽五行があつたと思ふから、之から出發するのが眞の支那哲學史ではないかと思ふ。陰陽五行が儒教哲學に著しく這入つて來たのは漢代である。卽ち漢以前に起つて漢代になつて盛になつたのであるから、普通の支那哲學史では此の陰陽五行思想をたゞ附錄の樣にして書いてある。殊に漢代の儒教に陰陽五行の這入つたのは、星の占があるから迷信的の處があり、儒教の本流でない樣に思はれて居る。斯く陰陽五行思想を漢代に持つて來て始めて說く事は、易や洪範の內容に就いて考へても遲すぎる。どうしても易や洪範を說く前に、陰陽五行思想を考へる事は重要であらうと思ふ。

其處で陰陽五行の思想と云ふものは、どうして調べたら割合に精しく分るものであらうか。其の材料の整頓に取りかゝるべきである。易や洪範は陰陽五行を既に成立つてゐるものとして、其れを應用して居るものである。故に易や洪範だけでは陰陽五行思想の組織が充分によくは分らない。其れには陰陽五行を本體として說いて居る材料を古書の中から取り出すべきで、其の爲には何よりも淮南子が最も適當のものと思はれる。

淮南子は漢の武帝の初め頃に出來た本で、西紀前百二、三十年の頃と見て間違がない。此書物は漢代のものであるから、之を以て上代の陰陽五行を考へる事は誤りでないかとの疑問も出るであらう

が、然し其の著作の性質から見ると、從來支那に存在して居た思想を纒めたものであつて、新しく考へて書いた性質のものではない。故に之に書かれた陰陽五行思想は、大體に於て昔からあつたものであるから、第一に之をよく調べるのがよいと思ふ。

淮南子には陰陽五行の事は澤山出てゐる。其の中で特に注意すべき篇は天文訓及び精神訓である。この兩訓は特に大切のもので、其の外色々何々訓と云ふ中で參考すべき材料は多い。

偖てこの天文訓に依つて陰陽五行思想が如何に取扱はれてゐたかと見るに、天文訓は天地の成立を說く處から始まる。卽ち宇宙生成論から始まり、そして日月星辰に說き及んでゐる。宇宙の成立をどう見るかと申しますと、それは宇宙の始は無であると見る。無なる處に宇宙を生ずる。道は虛廓に始まる。無の處から宇宙が生ずるのであり、この宇と宙とは只今の空間と時間と云ふ事である。この時間空間が出來た處に氣が出來る。この氣は生きてゐるものである。氣は一通りのものとして存在しないで、次第に其の中に區別が出來て來た。輕くて淸んだものと、重くて濁つたものとの區別が出來て來る。其れまでは平等無差別のものが、斯く差別を生じて來る。輕くて淸んだものは次第にたなびいて天を作る。重くて濁つたものは沈みかたまつて地となり、斯くて天地が成立する。其の天の輕くて淸んだ氣の中に、日月星辰が表れて來る。重くて濁つたもののかたまつた地には、山川草木禽獸が出來て來る。輕淸の天は陽であり、重濁の沈んで出來た暗い地は陰である。斯くて陰陽が對立した事にな

る。陰陽說の起源は斯く說かれてゐるのである。

日月星辰の出來るに就いては、この陽氣が殊に凝集して强い力を持つ場合に、其れが日となつて表れる。積陽の熱氣が太陽である。それから地は陰であるが陰氣は地だけに留つてゐるものでない。陰の氣でも輕くて上つたものがある。斯くて陰氣が天にかたまつたものは月である、積陰の寒氣が月である。斯くて陽である天に、陰と陽のかたまりが日と月としてかゝつてゐる。次に他の星は陰陽のかたまりであるところの日と月とから溢れて飛び出したもので、木火土金水の五星となり、或は他の恒星となる。地の上に於ては陽の最も强いものは火であり。陰の最も純なるものは水である。天に日月あり、地に火水がある。天に木火土金水の五星がある樣に、地にも木火土金水の物質がある。斯樣に始め陽氣が上つて天となり、陰氣が沈んで地となり、天に陰陽の性質を有する日月がある樣に地に於ても同樣である。之が組合はされて萬物となる。斯樣に宇宙の生成を論ずるのが天文訓である。

次に精神訓の方になると、人間の發生を論じてゐる。之にある所を大體概括して申しますと、人間の發生は天の氣と地の氣とがあつて、之が結合して出來たものである。地の氣は我々の肉體であり、天の氣は我々の精神である。生きてゐる間は結合して活動するが、死すれば夫々はもとの處に歸ると云ふ。卽ち肉體は地に精神は天に歸るのである。精神は天のものをそのまゝ受けてゐるから、之に於て取扱つてゐる精神は、現在の我々の精神と言つて居るものよりは物質的のものである。其れは輕く

て清んだ氣から出來た天から分れて出來てゐるからして、一種の物質と云ふべきである。肉體は無論物質である。精神を物質と云ふのは非常に變な事であるが、支那古代の思想では物質である。例へば酒の中から拔き出したアルコールはスピリットであり、スピリットは精神とも譯される。支那古代の思想で取扱ふ精神といふものは此のスピリットの樣なものである。精神が物質でない等とは簡單に云はれない。支那思想を說く場合には、精神は輕い物質であると考へるべきで、其れ以上の超越したものと考へられない。我々の精神は天から來て、それが地から來た肉體と結合し、死すると離れて夫々天地に歸つて、斯くて我々の精神と肉體とは不滅である。靈魂の不滅はこの點からも考へられる事である。かゝる人間の心身の構成からして、人間の修養法が精神訓に說いてある、精神は元來輕くて清んだ天氣であつて、聰明な智慧のはたらきがこもつてゐる。精神の活動は理智的であり、肉體の活動は盲目的のものである。感情や欲望の方面は肉體の司るものであり、理智の方面は精神の司るものである。精神は人間が體を持つ時に貫つてゐるから理智は固有であり、卽ち本心であり良心である。而して感情欲望は本心を亂すもので、本心が感情欲望を統御して其處に人間の善なる行爲が出來る。精神が統御を誤る時は惡なる行爲が出來る。如何にして精神の活動を完全にして肉體をして精神を亂させない樣にするかと申しますと、肉體を靜めるべきである。肉體の中の最も活動的なものは血である。この血の中にこもる氣は血氣と云ふものであつて、この血氣を靜めて行くと、自ら精神の聰明なる活

動が自由となる。血氣が體の部分に停滯する樣になると、感情や欲望に偏した活動になり、惡事を爲し病氣を起す。修養とはこの血氣を靜める事であつて、之が精神訓に說いてゐる所である。

淮南子は老莊の思想の系統を引いてゐるから、儒敎と關係のない樣にも思はれるであらうが、然し之は儒敎老莊に關係なく陰陽五行の思想を說いてゐると云へる。故に暫く儒敎或は老莊に觸れないで說く事が出來ると思ふ。この精神と肉體との關係は、卽ち陰陽の關係であり陰と陽とが結びついて萬物が出來、宇宙の現象が生ずる。之が天文訓や精神訓にあるもので、之を以て總てを說き盡してゐる樣である。次には五行のことを之に添へて申して見たいと思ふ。

五行のことも天文訓に精しく出てゐる。先程申した陽氣の塊である日と、陰氣の塊である月とから溢れ出たものが星であり、この中木火土金水の五星は肉眼で見える星の全部である。古代人の知識にのつた惑星の全部は此の五つの星に限つてゐる。故にこの五星に注意を拂ひ、日月に次いで色々の意味を與へてゐる。天體に於ける色々の現象は、地上に於ける現象に影響を與へる。又天地の氣の結合なる人にも影響を與へる。かくて天地人の關係は密接不離である。天に五つの星があつて、夫々の活動があり色々の變化を起す場合に、地にある五種の物質卽ち木火土金水に變化を起し、之等の結合してゐる人間の體や心に變化を起すのも當然である。この五つの星を地に於ける五つの物質と結びつけて考へて、之を五行と稱する。五行とは五つの運行するものといふ意味である。之が運行の色々な組

合せが出來て、色々の變化現象を生ずる、この五つは故に元素と言ひ換へることが出來る。その最も純粹なものは、天に上つて木火土金水の五星となつてゐると見られて居たのである。さて五星を發見する以前に、地上の五元素の觀念があつたか否かを考へて見る時は、地上の元素は必ずしも五つに限らないでせう。之を五つに限つたのはどう云ふ事に依るのか。人間の指は五本あるから元素を五つに考へたとも言へよう。天文訓から言ふと、地上の五つの元素は天の五つの惑星と離れない關係を有する。古代人が假に六つの惑星を發見したとすると如何。六行說になるではないか。又七つを發見したら七行說になるであらう。地上の元素は木火土金水の外に石等も這入るべきで、之を入れずに五つにしたのは、天に五つしか惑星がなかつたからであらうと思ふ。故に五行說は天體の五つの惑星に注意した後に出來上つた學問と思ふ。この陰陽と五行とは其の間に如何なる關係があるかと考へると、五行は陰陽から流れ出た物質が五通りの星となり、夫が別々の性質を有するから、日から出たものはそれだけで塊まつて居らず、月から出たものは其のものだけで塊まつて居らず、其れらは色々自由に結び附き方をしたので、五星となつたのは五通りの結合をしたからである。之を想像して見るに、太陽から流れ出たものは、火の塊が太陽となつたのであるから、火星と見てよからう。水の塊が月になつたと云ふから、月から流れ出たものは水星である。其の外のものは中間的のものであつて、日と月から出たものが色々の組合せをしたのである。其處で大體の性質から、陽氣を多く含んだものは太陽より流

れ出たものを多く含み、陰氣を多く含んだものは月より流れ出たものを多く含んで居るのであらう。木星は陽氣が多く陰氣が少い。金星は陰氣が多く陽氣が少い。又土星は中間的のもので陰陽平均のものであらう。かくの如く考へる傍に又別に木火土金水が季節に配當されてゐる仕方を考へ合せる事が考察を進めるために都合がよいと思ふ。之を圖示すると次の如くである。

木星	木	春 土	陽多く陰少し。
火星	火	夏 土	陽
金星	金	秋 土	陰多く陽少し。
水星	水	冬 土	陰

（土星に當る土用を各の終に中間的のものとして置く）。

此處に一つの證據を得る樣である。つまり五行と云ふ事は、陰陽が一段と複雜に展開した形と見る事が出來る。五行は陰陽說と結びついてゐるもので、之以外に拔け出して居るものではない。どうして木火土金水の名を附けたかと申しますと、五つの性質を有する惑星が、別々の働を地に及ぼして地上のものに對應してゐると云ふ假定の下に、地上のものを拾つて五通りに分けて見て、更に天の星に當てはめる時に、どれが火に當り、どれが水に當るかを考へる。火星は一番赤い星であるから火星と云ふべく、金星は金屬の色の樣に光るから金星と云ふべく、木星は木の樣に青々としてゐるから木星と

云ふべきであり、水星は灰色の樣な光であるから水星と云ふべく、土星は中間的の色合であるから中間的の土で名をつけたので、大體色から出てゐると思ふ。淮南子の天文訓精神訓より考へた結果を統合するに、陰陽五行は天體が如何に地上に影響するかと考へた時代に組織されたもので、五行說は陰陽說を一段展開したものであるから、陰陽說と離れ得ないと云ふ結論が出來ると思ふ。

陰陽五行は陰陽の二元から說き出すべきものか。この二元は最初からあるのでない。氣に自然と堺がついて、輕くて淸んだものと、重くて濁つたものとの二つが出來たのであると見るのであるから、この二氣の出來ない以前の最初の一氣を考へるべきである。一つの氣が二氣に分れたのである。故に陰陽說は單純に二元說でない。その前の一つは淮南子では太一或は一と名付けて居る。之が本のものである。太一が別れて陰陽となつたのであり、三元になつたのではない。この太一と云ふ事は、淮南子の外に呂氏春秋にも、太一兩儀を生ず、兩儀陰陽を生ず、とある。陰陽は卽ち兩儀である。この太一は易の繫辭傳に「是故易有二太極一、是生二兩儀一」とある太極と同じに考へるべきもので、太一陰陽は太極陰陽と言つてよいのである。陰陽五行說は卽ち太一陰陽五行說であり、又太極陰陽五行說である。又說と言ふ事を考へて見るのに、昔から陰陽五行說と言ふが、この說と言ふ事は觀念が不明瞭である。哲學と云ふ詞で取換へ、太一陰陽五行の哲學でよいと思ふ。之をギリシャ哲學に比較すると、宇宙の生成を論じ、神や人間や政治道德等を說く事は、總て哲學である。故に之を哲學と言つてよい

と考へる。

其處で易や洪範は陰陽五行哲學の應用的の書物である。其の原理を組織的に說いたものでない。故に若し成立の順序を論ずれば、易や洪範の出來る前に陰陽や五行の哲學が成立して居たのである。故に支那哲學史を說くには、陰陽五行哲學から出發すべきと思ふ。之を說いて後に易や洪範に如何に應用されてゐるかを考へるべきである。易には如何に應用されてゐるか。變化を說く易に於ては、太極を說く必要はない。乾坤を說けばよいのである。卽ち陰陽の變化でよい。この組合せが色々になり、之に依つて自然界の現象を類別し、人間社會の現象を類別する。自然界の現象と人間社會の現象とは關聯し對應して居る。易は一つのもので兩樣に說明される樣になる。その變化の形をどう云ふ樣に見て行くか。最初の二つの形は☰☷であつて、之が逐次に展開して $2^2=4$ $2^3=8$（八卦）となり、次第に $2^4=16$ $2^5=32$ $2^6=64$（六四卦）と展開して行く。之を數學的に取扱つて、二つのものが第一段の展開には $2^1=2$ となり、之より前述の如く第二段第三段と無窮に展開させてもよいのであるが、其處までは取扱ふ必要がない。故に易は六十四卦に限つて大體の類別をして說いたものと見てよからう。

次に洪範の五行を哲學的のものとすることには反對論者があつて、洪範の五行は人間の生活に必要な材料を五つ數へたものである。洪範は政治の書であるから、人間の生活に必要な五つを敎へたのである。其の證據は左傳の中にも五材と云ふことがあるではないかと論じて居る。斯く洪範の五行を單な

る五材として說く人があるが、然し五材を何故五行と記してあるのか。之は不思議なことではないか。之が一つである。其の次に五事と言ふ事がある。五行の記事の中にも五行を五つの味に當ててある。卽ち鹹(水)苦(火)酸(木)辛(金)甘(土)と當ててある。斯かる味に當てるなどの事は、所謂五行說である所のことである。從つて洪範の五行はやはり五行說の五行であつて、單なる五材ではなからうと考へる。

次に陰陽五行說は淮南子の記事に依つて申上げた樣に、天文觀測の智識と伴つてゐるが、この洪範の中にも天文の觀測が大切であると書いてある。五紀の中に歲月日星辰曆數とあり、日月星辰等の運行を見て吉凶禍福を考へるのであつて、天文の智識の行渡つてゐる時に、洪範が出來たと考へるべきであるから、五行を單なる五材と說く事は誤つてゐると思ふ。故に洪範は五行哲學の範圍に屬すべきである。又易は陰陽哲學に屬するものである。

然らば易には五行哲學の痕跡は無いか。洪範には陰陽哲學の痕跡が無いか。處が易の中に五行の痕跡がある。易の坤卦の六五の所に、「黃裳元吉」と云ふ事がある。左傳昭公十二年の條に之を引いて「黃裳元吉。黃は中の色なり」とあり、黃色を以て中央の色と爲してゐる。黃色を中に聯想するのは五行說である。五色を方角に配し且之を五行に配當する時は、東方を木に配當して其の色を靑とし、南方を火に配當して其の色を赤とし、西方を金に配當して其の色を白とし、北方を水に配當して其の

色を黑とし、中央を土に配當して其の色を黃とするのである。黃を中の色なりと云ふ考は五行思想から來てゐる。この外易の內外卦の各中央爻に黃色を使つてゐる事が多い。之が五行思想の易に這入つてゐる證據である。

次に洪範の中に陰陽思想が這入つてゐるかと申すと、洪範に卜筮がある。筮は其の字の構造から見るときは竹で占ふものである。之は易の筮の外にない。易は陰陽で組織したものであるから、筮がある以上は、やはり陰陽思想の痕跡がある。故に洪範は五行を主とし易は陰陽を主として說いて居るけれども、何れも陰陽五行思想が根本になつてゐると思ふ。五行哲學のある處に陰陽哲學があり、陰陽哲學のある所に五行哲學がある。易は陰陽だけで說く傾向があるが、背景としては五行を含んでゐる。洪範は五行だけで說く傾向があるが、背景としては陰陽を含んでゐる。故に陰陽五行哲學は支那哲學の原頭であると說き始めるのがよからう。是迄說いた處は、幼稚な天文學・物理學であるが、決して迷信ではない。この哲學が應用されて、天地人の現象がお互に影響されると言ふ點から、天の現象を人事の占に用ひる樣になつては、獨斷的となり、迷信となり、それが漢代に至つて著しく現れて來たのである。況んや後世に於て日の吉凶を占ふ樣になつてからは全く迷信となつてしまつた。然し始は確な學問である。この考を基礎にして易も洪範も出來てゐる。漢書藝文志に陰陽家者流を說いてゐるが、其の中に日月星辰を曆象する事は大變よい事であるが、日の吉凶を兎角する事は惡い弊害であると論

じて居る。この樣な弊害に落ちない陰想五行哲學を冒頭に說いて、之に依つて易や洪範に及ぶべきであると思ふ。又老子の思想を說くにも陰陽說で說ける。老子の中には陰陽五色五音があるから、陰陽五行說を含んで居る。老子の思想は他の書に太一太極と稱して居る混沌たる處を名付けて道と言ふ。其の道に歸すればよいのであつて、其れが分れた陰陽に拘束されると不可である。老子の說による修養は、我々の肉體から來る感情欲望を沈靜させる事であり、我々の精神より生ずる聰明を全く働かさせないことである。斯くして最初の無の狀態に歸することがよいのである。太極に歸するのが老子の目指す所である。次に孟子の考は如何と言ふに、怒を懲し血氣を靜める事は老子と同樣であるが、然し心の聰明を引立て、義を集め理智的の方を磨いて善惡の判斷をはつきりさせて行き、精神の力を强くすることに重點を置いてゐる。荀子は聖人の定めた禮に依つて、總ての人は自分の行爲の標準を求め、其の規範に從つて行動する。禮を以て感情欲望を規律に入れれば、大にして淸く明るい大淸明の精神を得る。性惡篇を讀み解蔽篇を讀むと、禮を行ふことに依つて、心の大淸明なる姿を得る。之は孟子の謂ふ所の義を集めた浩然の氣と違はないと思ふ。荀子は良心を磨くことを後にして肉體を抑へることを先にしてゐる。老子は肉體も抑へ精神も抑へて無に歸する。精神肉體卽ち陰陽を抑へて無なる太極に歸するのである。孟子は陽を磨く事に重點を置き、荀子は陰を抑へる事に重點を置く。說き方は異るも、其の根本は陰陽哲學を出でない。荀子の書物にも陰陽あり、老子にもあり、而も荀子は老

子の影響を受けてゐる事は荀子の言葉に依つて明である。卽ち儒敎の思想に老子を加へて展開したと思はれる。孟子は陰陽五行は言はないが、この時代に此の思想がないと斷言する事は出來ないと思ふ、孟子の直ぐ後に鄒衍が盛んに之を說いた。桓寬の鹽鐵論に載つてゐる所に依ると、彼はもと儒者であつたが、用ひられなかつたので、陰陽五行に依つて信用を得る樣になつた。この人が孟子の直後に出た陰陽五行家であるが、彼は之を發明したのでなく、之を儒敎に取込んで說いたものと思ふ。

尙一つ談を進めると、孟子は書經や詩經を尊重した。書經には洪範がある。彼は易經を見たか否か。見たとすれば此の思想があるべきであり、見ないとしても孟子の思想は易の理を知らざる者でない事は、孔子を稱して「聖の時なる者なり」と言つた事に依つても知られる。洪範は書經の一篇である故、孟子は陰陽五行の思想を知らなかつたと斷言し得ない。故に孟子の時に支那に陰陽五行の思想が存在しなかつたと斷言し得ないと思ふ。この思想に依つて孟子の思想を說明して見るのは、大した不合理でないと思ふ。孟子は「志は氣の帥なり。氣は體の充なり、」と言つてゐるが、この氣と浩然の氣とは同一のものか違つたものか。體の充てる氣は血氣であり、志は精神の中にこもつてゐる理知目的性であり、之が血氣を指導すべきものである。浩然の氣は志を備へてゐる所の氣で肉體のものでなく精神の方である。斯く分けて解釋するとよく分ると思ふ。浩然の氣を古註には「天氣也」と註してある。之は精神である。精神の活動の廣々とした處を指したもので、之は義の集つたもの、理智を備へ

たものである。精神は自ら聰明のもの理智的のものである。そこで義を集めることによつて浩然の氣を養ふ事が出來る。斯く解すると淮南子の精神訓を參考にして、荀子も孟子も老子も、莊子も、皆この陰陽五行で解く事が出來る。只其の應用がそれ〴〵違つてゐるだけである。後世に及んでは、陰陽五行哲學は、又支那哲學の重要なる部分を占めることになつた。それは宋の儒學である周濂溪の太極圖說まづに現れて來て、陰陽五行の事が書かれてある。卽ち之は宋學の原理である。此の思想が古代のものと如何に違つてゐるか。

宋代の太極は理である。然し古代哲學に於ける太極は其の儘理でない。古代哲學に於ては、精神が理智を有する天のものである。太極から分れ出た天である。太極には理智があると云はない。宋の哲學では理智を太極に入れた。然し天と太極とを混合して使用して居り混同してゐる。其處に宋代哲學のはつきりしない所があると思ふ。宋代哲學に反對する我が伊藤仁齋・山鹿素行等は之に注意して此處に出發する樣に思はれる。「太極は卽ち理なり」とは古代に於て言つたものでない。新しい儒敎哲學で言ふことである。佛敎の影響もあるかも知れない。之は今日精しく論じない。

大體古代哲學は先づ陰陽五行の哲學があつて、易や洪範や老子や孟子荀子等の思想はその應用として現れて來たと、斯く觀て行くのが私の一つの見方としてゐる所である。

次に此の陰陽五行說は支那の何時代に發生したか。つまり天文の智識に伴つて發達組織されたので

あるから、一方天文の發達史を考へて行くべきである。之を考へる時には、私の考は支那の陰陽五行哲學の發生したのは、戰國時代であると思ふ。私の今日まで考へて居る處では、西曆紀元前四百年から三百五十年の間に出來たものと思ふ。斯くなつて來ると大變な事が出來て來て、易も洪範もこの後に出來たと說くべき事になる。之は極めて重大なる問題でありまして、此の問題を提出し御研究の一つの材料に供したいと思ふ。

次に支那哲學に於ては、宇宙を說く哲學が一種しかない事は、非常に貧弱の樣に思はれる。而も誰が說いたか傳へる所がない。然し其の應用は多い。之が支那哲學の特色の一つの問題になると思ふ。尙陰陽五行說に就いては、私の書いたものが岩波講座の東洋思潮の中に出てゐるから參照して貰いたい。甚だ雜然たる話でしたが之で終ります。（講演筆記）